Anaciport
アナキポルト

対話

世代を超えて

これからの社会の問題を話し合う

イベント内容

毎回15名程度の参加者が集まり、3つのテーマの中から一つを選んで約1時間の対話を行っています。テーマや論点には、簡単には答えが出ない社会の問題を扱っており、参加者同士でじっくりと議論できるものを厳選しています。テーマについて十分な知識がない参加者もいるため、対話の前に30分ほどの解説講義を行い、理解を深める機会を提供しています。

対話の始めには、参加者に現時点での意見を模造紙に書き出してもらい、話し合いのきっかけとしています。ファシリテーションについても工夫し、「考えがまとまっていなくても話してよい」「感情も伝えてよい」と事前に伝えることで、リラックスして発言しやすい雰囲気づくりを徹底しています。

事前準備

本イベントの準備として、約1~2か月かけて、テーマの選定および講義資料の作成を行なっています。テーマについては、①「教育」や「労働」など、参加者にとって身近で興味を惹きやすいもの、 ②容易には解決しないジレンマを含み、意見の対立が見込まれるもの、 ③学術的な深みがあるもの、の3点を基準に選定しています。

資料の作成にあたっては、メンバーで分担し、何冊もの学術書を幅広く調査しています。テーマに直接関係するものからそうでないものまで調査を行うため、その中には論点に採用されなかったものも多くあります。参加者にとって学びの深い対話会を提供できるよう、私たちは日々の勉強を欠かさないよう努めています。

活動の目的

——社会の分断と対立を乗り越える民主的な対話の場の実現

私たちが目指すのは、社会の分断と対立を乗り越えるための民主的な対話の場です。分断の要因はいくつかありますが、ひとつにはコミュニティが細分化され、真実や倫理が共通のものではなくなっていることが挙げられます。私たちは多様な立場や背景を持つ人々が社会的なテーマについて意見を交わし合う対話を通して、参加者が自身の価値観を、ひいては社会に対する見方を捉え直し、再評価することを期待しています。

それは参加者だけではなく、活動するメンバーにも言えます。対話会の開催にあたり、扱うテーマについて事前に入念な調査を行いますが、その過程で私たち自身も多くのことを学びます。また、メンバーの多くが大学院生ですが、対話会でアカデミアの外に身を置く人たちと話すことで、市民の感覚と学術的な視点のギャップを知り、それを埋める方法について考える機会になっています。学問的な観点で言えば、多くの人々にとって人文系の学問に真剣に触れる機会は少なく、それゆえ軽視されがちな面もあるように思いますが、こうした対話会をきっかけに人文系の学問の存在を知り、その意義を感じてもらいたいと思っているメンバーもいます。

活動を通じて得られたこと

——答えをハッキリさせたがる時代にあえてモヤモヤする経験を

異なる価値観や経験を持つ人たちと何かを調停するのはこんなにも難しいことなのだと、身をもって感じました。対話会に来てくれる方たちですら、普段は社会のことを考えません。仕事に全てを持っていかれてそんな暇や時間、意志を持つ余裕はないのだということを実感しました。

社会・政治に関する対話の機会が極端に少ない日本において、対話をする機会によって救われる人がいるということがわかりました。内にある様々な蟠りを吐き出す場として、この対話会が機能していると感じます。

私たちの対話会ではしばしば、対話の結果として結論が出ず、最後までモヤモヤしたまま終わることがあります。しかし、そのような回の方がむしろ、参加者の満足度が高い傾向にありました。何事も答えをハッキリさせたがる世の中だからこそ、そのような場を求めている人が多くいるのだと気づきました。

過去に様々な対話のテーマを用意してきましたが、その中でも学術的な背景のあるテーマの方が、充実した対話が行われる傾向にありました。学術的な文脈においても盛んに議論されているということは、容易には決着しないような十分な深みがあり、かつ社会的な意義があるということです。また対話を通じて、参加者にも具体的な知識を提供できるという点でも優れています。

現状の課題と今後の展望

——良い対話には、少なからず不快感や苛立ちが伴うもの

参加者の中には、闊達に自身の意見を変えられる方がいますが、その一方で決して思想的な安全圏から出ようとしない方もいます。 そしてそのような方は、参加したことに満足して帰ってしまいます。私たちの対話会は、参加者が話したいことを話して、気持ちよくなってもらうことを目的とはしていません。 むしろ、異なる世界観・価値観に触れたときの反感を利用して、自己破壊を引き起こしてもらいたいと思っています。

そこでまず、良い対話には少なからず不快感や苛立ちが伴うということを私たち自身がしっかりと認識しなければなりません。また対話の実践においては、参加者が個人の主観にとらわれず、より俯瞰的な視点で物事を考えられるよう、事前に学術的な知見を共有するなどの工夫が必要です。さらに、対話会だけで完結することなく、日常的に社会や学問に目を向けられるよう、対話を設計しなければなりません。これらの課題をふまえて、現在私たちは、対話会イベントの刷新を計画しています。新しい形態のものについては12月以降に開催予定です。